GBS501J　聖書学研究Ⅰ（解釈学）

伊藤 明生

2 単位
大学院棟 講義室C
春 火曜-1限,2限

＜授業の内容とねらい＞

生きることは解釈することである。聖書を解釈する前に人は、誰もが自らを、また人生を解釈している。自らを中心に位置付けた世界が私たち個々人が生きる世界に他ならない。私たちは無意識のうちに自らとの関係で物事や人を解釈して理解する。この無意識のうちに実行している解釈を意識することが重要な課題である。神のみことばは普遍的であると思いがちであるが、神のみことばを読んで解釈する私たち人間は有限で、時間と空間の制約のうちに生かされている。本科目では、聖書を解釈・理解するとは一体どういうことであるか、古代・中世・宗教改革から、シュライエルマッハー、ガダマー、リクール、カール・バルト、読者応答批評・受容理論、記号論・構造主義・ポスト構造主義、フェミニズム神学や解放の神学等の社会批評に至る近代及び近年の聖書解釈の方法論を、その背後にある哲学的、神学的な枠組みを踏まえて考察する。講義に重点を置きつつ、各自が思想家またはテーマを選び授業で研究発表したり、聖書解釈と関連付け考察を行う演習を行ったりする。ポストモダンの今、思想的哲学的考察を抜きに真の意味で聖書を読み、解釈して説き明かすことはできない。

＜授業テーマと内容＞

第1週 『それで君の声はどこにあるんだ？』：黒人神学の挑戦
第2週 神のみことばと人の言葉：テクストと意味：意味の意味と解釈
第3週 古代と中世の聖書解釈
第4週 宗教改革の聖書解釈：聖書の明晰性
第5週 シュライアーマッハーの聖書解釈
第6週 ハンス・ゲオルク・ガダマーの解釈学
第7週 ポール・リクールとカール・バルト
第8週 読者応答批評と受容理論
第9週 記号論・構造主義
第10週 ポスト構造主義の解釈学：ポストモダンの解釈学
上記の内容はあくまでも予定であって、学生諸君の希望に応じて変更することもあります。

＜到達目標＞

21世紀の日本に生きる私たちが二千年以上も前に書かれた聖書を読み、解釈して理解するには、様々な数多くの要素が微妙に複雑に絡み合うことを理解し、その上で聖書をより良く読み、解釈できるように、自らを整えて備えることを理解することを目指す。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
B 説得力と表現力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

＜(*)教科書・参考書＞

伊藤明生 「聖書の解釈」『聖書神学事典』 いのちのことば社，2010年，35～54頁。
『聖書読解術』榊原康夫 いのちのことば社，1970年。
Hermeneutics: An Introduction, Anthony C. Thiselton
New Horizons in Hermeneutics: the theory and practice of transforming biblical reading, Anthony C. Thiselton
『文学とは何か』テリー・イーグルトン (大橋洋一訳) 岩波書店，1997年。
*『神のことばを解釈するということ　神のことばを人の言語で読む』南野浩則（いのちのことば社）
*『それで君の声はどこにあるんだ？　黒人神学から学んだこと』榎本空（岩波書店）
『誰にも言わないと言ったけれど（「黒人の炎」を受け継ぐために～黒人神学の泰斗、その人生の）』ジェームズ・ H. コーン（新教出版社）
『十字架とリンチの木』ジェームズ・H. コーン（日本キリスト教団出版局）
『夢か悪夢か・キング牧師とマルコムX』ジェームズ・H. コーン（日本基督教団出版局）

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 10 %
リフレクション 10 %
期末レポート 40 %
期末試験 40 %
解釈に関する理論、解釈学に関連する理論家の著書を一冊選んで取り組んで、授業でプレゼンして、レポートにまとめること（40%）。毎回の授業の終了後にリアクションペーパーを提出すること（10%）。期末試験では、本科目で学んだこと全体を十分に把握できたか確認します（40%）。「授業参加度」は、出席点ではないので、授業に参加・貢献した程度が加味されます（10%）。

＜準備学習等に必要な時間＞

一回の授業にために最低限4時間程度の読書の準備。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

フィードバックを希望する場合には、メールなどで対応しますので、遠慮しないでお尋ねくださいませ。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

課題作成のための調査、アイディア出し、資料の翻訳等の利用を認めます。
課題作成のための構成の検討、表現の調整や校正等の利用を認めます。ただし、生成AIの利用プロセスを明示することが求められる場合があります。

＜その他履修上の注意点＞

ゼロからの学びではきついので、ぜひ予め、関心を抱いて読書しておいてください！
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。
本科目は、「どこでもTCU」対象科目です。正規生以外の参加の可能性があります。

GBS502J　聖書学研究 II （緒論）

伊藤 明生
公文 光

2 単位
大学院棟 講義室C
春 金曜-1限,2限

＜授業の内容とねらい＞

聖書緒論は、聖書が執筆された当時の歴史的状況に位置づける聖書学の一専門科目で、総論と各論に二分されるが、本科目では総論のみを扱う。旧約・新約聖書に共通するテーマとして、聖書原典本文の復元を試みる過程で遭遇する諸課題を扱う「本文論」と、どのような基準で各書が神的権威を帯びたものと判断されたかを歴史的に辿る「正典論」を中心にして講義する。
（オムニバス方式／全10回）
（公文　光／５回）　旧約聖書緒論では、旧約本文の歴史と正典論、Stuttgartensia版のヘブライ語テキストとCritical Apparatusを用いての本文批評のためにどのように扱うべきかを学ぶとともに、五書批評学の主要問題を概観することにより、旧約聖書学への導入とする。
（伊藤　明生／５回）　新約聖書緒論では、新約本文の歴史と正典論、Nestle-Aland 第28版のギリシア語テキストとCritical Apparatusを用いて本文批評の理論と実践を教授する。また、様々な文学類型の特徴を学習し、解釈への基盤とすることを目的とする。

＜授業テーマと内容＞

第1週 旧約聖書本文研究①（公文）
第2週 旧約聖書本文研究②（公文）
第3週 旧約聖書正典論（公文）
第4週 五書批評学①（公文）
第5週 五書批評学②（公文）
第6週 新約聖書本文研究①：写本（伊藤）
第7週 新約聖書本文研究②：実際（伊藤）
第8週 新約聖書正典論①：歴史（伊藤）
第9週 新約聖書正典論②：外典（伊藤）
第10週 新約聖書の文学類型（伊藤）

＜到達目標＞

旧約聖書および新約聖書の本文と正典性について基本的な知識を得ること。特に、何が問題であり、どのような解決方法があるかを知ること。さらに、多様な文学類型の存在に関するこれまでの研究の歴史を学び、それぞれの文学類型にふさわしいアプローチが何であるかとの問いを先鋭化させ、釈義・解釈のための良い基礎を築くこと。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

＜(*)教科書・参考書＞

ヘブライ語旧約聖書(Biblia Hebraica Stuttgartensia)
榊原康夫 『旧約聖書の生い立ちと成立』 いのちのことば社，1994年。
ギリシア語新約聖書 （Nestle-Aland または United Bible Societies のもの）
The Text of the New Testament: An Introduction to the Critical Editions and to the Theory and Practice of Modern Textual Criticism. K. Aland and B. Aland, (Eerdmans, 1995)
『新約聖書の生い立ちと成立』榊原康夫（いのちのことば社、1978年）
Nestle-Aland 28thのtextual apparatus

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 10 %
リフレクション 5 %
発表 10 %
期末レポート 20 %
期末試験 55 %
最終評価は、主担当教員が行います。
旧約（50%）：授業参加と発表15%、期末試験35%
新約（50%）：授業参加5%、リフレクションペーパー5%、レポート20%、期末試験20%

＜準備学習等に必要な時間＞

各講義に対して3時間程度

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

フィードバックを希望する場合には、メールで問い合わせてくだされば、個別に対応させていただく。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

＜その他履修上の注意点＞

ヘブライ語とギリシア語のアルファベットの読み書きや初級文法既習済みでないと修得することに困難が伴う授業の内容であることは予めご承知おきくだい。
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。

GBS503J　聖書学研究III（五書）

公文　光

2 単位
大学院棟 講義室C
春 金曜-3限,4限

＜授業の内容とねらい＞

モーセ五書は聖書に登場する主要な神学的なテーマを扱うという点で極めて重要である。本コースでは、とくに五書における「堕落」「宥め」「信」等、神学的に根幹的なテーマを扱っていく。１９世紀以降においては、これらのテーマを資料説に基づいて資料別に分析する傾向があるが、本コースではより有機的に、五書全体が同じことを語っているという前提で分析していく。

これらのテーマを考える際に、散文と律法がそれぞれ、どのように同じテーマをアプローチしているのかにも注目しつつ考察する。両方のジャンルを扱うことにより、それぞれの語り方の特徴も確認したい。散文はとくに創世記、律法についてはとくにレビ記を重点的に扱っていく。

また、本コースは聖書学の一環であることを意識し、これらのテーマを扱うにあたり言語学的な根拠からはじめ、神学的な考察に至るまでの流れの全体を考える、聖書学的な視座に立つ。

本コースは教会で講解説教をする者が受講することを想定している。講義はヘブライ語の文法の最低限の理解がある前提で進めていく。

＜授業テーマと内容＞

第1週 創世記３章における「堕落」
第2週 アブラハムの「信」①
第3週 アブラハムの「信」②
第4週 レビ記における「聖」と「ささげ物」
第5週 レビ記 4–6:7 における罪
第6週 けがれ①
第7週 けがれ②
第8週 「聖となる」こと；隣人愛の戒め
第9週 「安息」にかかわる規定
第10週 第５戒にかかわる規定

＜到達目標＞

堕落から「信」に至るまでのことについてモーセ五書が何を語っているのかを理解すること。また、その理解に至るまでの方法論を身につけることを目的とする。とくにレポートを通して実際に釈義を実践することにより、目的を達成することができたかどうか確認していく。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

＜(*)教科書・参考書＞

Biblia Hebraica Stuttgartensia
G. J. Wenham, Genesis 1-15. Word Biblical Commentary 1. Waco, Texas: Word Books, 1987.
G. J. Wenham, Genesis 16-50. Word Biblical Commentary 2. Nashville: Thomas Nelson, 1994.
J. Milgrom, Leviticus 1–16. Anchor Bible 3. New York: Doubleday, 1991.
G.J. Wenham, Leviticus (New International Commentary on the Old Testament) Grand Rapids: Eerdmans, 1994.
N. Kiuchi, Leviticus. Apollos Old Testament Commentary 3. Leicester: InterVarsity Press, 2007.

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 10 %
課題 20 %
期末レポート 60 %
その他 10 %
「その他」は議論への参加度ですが、単に議論に参加する、あるいは、発言の頻度というよりも、発言の「質」を問うています。

＜準備学習等に必要な時間＞

各授業に280分程度

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

学生は特定とトピックについて研究することになるが、学期途中で、個々の学生に研究の中間報告をさせ、教官がコメントを通して方向性を調整する。最終的な研究成果の評価の際にもフィードバックがある。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

利用を認めません。生成AIの利用は不正行為とみなします。

＜その他履修上の注意点＞

ヘブライ語の文法を終えていること。
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。

GBS504J　聖書学研究Ⅳ（歴史書）

佐藤　潤

2 単位
大学院棟 講義室C
秋 火曜-1限,2限

＜授業の内容とねらい＞

旧約聖書「歴史書」の各書を相互に位置づけながら、全体の構成と時代背景について考察し、イスラエルの歴史物語を読む際に注意しなければならないヘブライ叙述の特徴について研究します。古代イスラエルの部族時代(ヨシュア記、士師記、ルツ記)、統一王国時代(サムエル記第一と第二、歴代誌第一)、分裂王国時代(列王記第一と第二、歴代誌第二)、捕囚後のペルシャ時代(エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記)について伝承された文献の中心的なテーマ、解釈学的な課題、また研究方法論を考察し、各書の歴史的、文学的、神学的意義を追求します。

While placing each of the Old Testament historical books in relation to one another, we will discuss the overall structure and historical background of the books, and study the characteristics of the Hebrew narratives. We will examine the central themes, hermeneutical issues, and research methodologies of the literature in ancient Israel and pursue the historical, literary, and theological significance of each book.

＜授業テーマと内容＞

第1週 コース&シラバス確認／イントロダクション
第2週 方法論①：言葉の機能と意味
第3週 方法論②：テクストと文脈、歴史学と科学
第4週 方法論③：考古学、古代中近東資料
第5週 出エジプトからカナン定着
第6週 カナン定着から王朝成立
第7週 イスラエル王朝
第8週 ヨシヤ王の宗教改革
第9週 歴史文学の成立
第10週 レポート研究発表会

＜到達目標＞

1）旧約聖書の歴史書の内容、構成、主要テーマを把握すること
2) 歴史書研究に必要な方法論を学び、聖書解釈のリテラシーを身につけること
3）歴史書を解釈することを通して、現代社会や教会の課題へのメッセージを読み取ること
4）歴史書について、他人に教えることのできる人材になること

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

発表(プレゼンテーション）, TCUオンライン

＜(*)教科書・参考書＞

＊旧約聖書（原典版と様々な翻訳版）
南野浩則『聖書を解釈するということ：神のことばを人の言語で読む』いのちのことば社、2020年
P. E. Satterthwaite and J. G. McConville, Exploring the Old Testament, Vol. 2: A Guide to the Historical Books. Downers Grove: IVP Academic, 2007.
Iain W. Provan, V. Philips Long, and Tremper Longman, A Biblical History of Israel. Second Edition. Louisville: Westminster John Knox Press, 2015.

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 10 %
発表 40 %
期末レポート 50 %
※ 授業参加度＝出席
※ 発表＝指定された聖書箇所のプレゼンテーション（30分）
※ 期末レポート＝歴史書の中から問題や課題を自分で発見し、その解決案を論理的にまとめるレポート

＜準備学習等に必要な時間＞

280分

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

一学期間で、一つの研究レポートを作成していただきます。途中、研究計画書の提出、最終講義での研究発表プレゼンテーションを経て、期末レポートとして提出していただきます。講師は、随時フィードバックをして、レポート作成を支援します。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

課題作成のための調査、アイディア出し、資料の翻訳等の利用を認めます。
課題作成のための構成の検討、表現の調整や校正等の利用を認めます。ただし、生成AIの利用プロセスを明示することが求められる場合があります。
利用範囲は担当教員に確認してください。

＜その他履修上の注意点＞
受講にあたって何か気がかりなことがある場合、例えば日本語での読み書きが困難である場合や身体的、精神的健康における懸念がある場合、レポートの書き方がわからない場合など、講師まで伝えてください。柔軟に対応します。
ヘブライ語未履修の学生も受講可能です。
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。

GBS505J　聖書学研究Ⅴ（聖文書）

平塚　治樹

2 単位
大学院棟 講義室B
冬 金曜-3限,4限

＜授業の内容とねらい＞

聖書学研究Ⅴ（聖文書）では、聖文書の中の詩篇を取り上げ、その言語的特徴と研究方法、釈義に関わる専門的な知識や能力を身につけることを目標とします。特に、ヘルマン・グンケル以来の様式史的研究方法を採用するのではなく、一つ一つの詩篇のテキストそのものを注意深く観察することで、その中の個別の言語的・構造的要素とその詩篇全体との一貫性に基づいた解釈を目指す文学的なアプローチ (Total Interpretation) について学びます。
In this course, the focus is on the Psalms within the Ketuvim (Writings). Students are expected to develop knowledge and skills in the exegesis and interpretation of the Psalms. Rather than adopting the form-critical approach established by Hermann Gunkel, this course emphasizes a literary approach known as Total Interpretation. This method aims to interpret each Psalm by closely examining its linguistic and structural details in relation to the whole.

＜授業テーマと内容＞

第1週 詩篇の研究方法①
第2週 詩篇の研究方法②
第3週 聖書ヘブル詩における並行法①
第4週 聖書ヘブル詩における並行法②
第5週 詩篇におけるメタファー
第6週 特定の詩篇についての発表と討議①
第7週 特定の詩篇についての発表と討議②
第8週 特定の詩篇についての発表と討議③
第9週 特定の詩篇についての発表と討議④
第10週 総括
学期の前半は講義形式、後半は演習形式（各学生による発表とそれに基づく討議）となります。学生は、提示された詩篇の中から一つを選んで研究発表をし、フィードバックを受けた上で、学期の終わりまでにレポートにまとめて提出します。

＜到達目標＞

注解書等に頼らず、自力で詩篇のヘブル語テキストに取り組むことを通して、その特徴について学びつつ適切な読み方と研究手法を習得し、旧約聖書の他の詩文の理解や研究にも応用できるようになることを目標とします。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

発表(プレゼンテーション）, 討議(ディベート)Debate, TCUオンライン, Teams

＜(*)教科書・参考書＞

Biblia Hebraica Stuttgartensia (出版年不問)
『聖書ヘブル詩の並行法ー詩行の反復表現が表すもの』、津村俊夫、ひつじ書房、2022年
The Bible from Within, Meir Weiss, Magnes Press, 1984

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 20 %
発表 40 %
期末レポート 40 %
「期末レポート」は、「発表」の内容に基づきますが、クラスでのフィードバックを踏まえたものを提出します。

＜準備学習等に必要な時間＞

各授業につき３時間程度

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

各学生は、研究発表の前に、その内容について教員からフィードバックを受けて方向性を調整します。発表後、クラスでディスカッションを行い、そこでの指摘を踏まえて期末レポートを執筆します。その最終レポートに対しても、教員からのフィードバックがあります。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

利用範囲は担当教員に確認してください。

＜その他履修上の注意点＞

ヘブライ語講読・釈義のクラスを終えていることを履修の条件とします。
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。

GBS506J　聖書学研究VI（預言書）

佐藤　潤

2 単位
大学院棟 講義室C
冬 木曜-3限,4限

＜授業の内容とねらい＞

旧約聖書「預言書」の各書を相互に位置づけながら、全体の構成と時代背景について考察し、イスラエルの預言書を読む際に注意しなければならないヘブライ叙述の特徴について研究します。古代イスラエルの王国成立前の時代、アッシリア時代(アモス、ホセア、イザヤ、ミカ)、王国終焉時代（ナホム、ハバクク、ゼパニヤ、エレミヤ)、捕囚時代（エゼキエル）、捕囚からの帰還時代（ハガイ、ゼカリヤ、マラキ、ヨナ）、それぞれの時代的文脈に照らし合わせながら、各書の歴史的、文学的、神学的意義を追求します。

While placing each of the books of the Old Testament prophetic books in relation to one another, we will discuss the overall structure and historical background of the books, and study the characteristics of the Hebrew prophesy that must be noted when reading the prophetic books of Israel. The historical, literary, and theological significance of each book will be explored in light of their respective historical contexts.

＜授業テーマと内容＞

第1週 イントロダクション&シラバス確認／導入
第2週 古代オリエントにおける預言者
第3週 預言と預言記述
第4週 初期イスラエルの預言
第5週 アッシリア時代の預言
第6週 王国終焉時代の預言
第7週 捕囚時代の預言
第8週 エルサレム帰還時代の預言
第9週 預言物語
第10週 レポート研究発表会

＜到達目標＞

1）旧約聖書の預言書の内容、構成、主要テーマを把握すること
2) 預言書研究に必要な方法論を学び、聖書解釈のリテラシーを身につけること
3）預言書を解釈することを通して、現代社会や教会の課題へのメッセージを読み取ること
4）預言書について、他人に教えることのできる人材になること

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

発表(プレゼンテーション）, TCUオンライン

＜(*)教科書・参考書＞

＊聖書
J. ブレンキンソップ『旧約預言の歴史 カナン定着からヘレニズム時代まで』樋口進訳、教文館、1997年
池田裕、大島力、樋口進、山我哲雄（監修）『新版 総説 旧約聖書』日本キリスト教団出版局、2007年
金井美彦、月本昭男、山我哲雄（編）『古代イスラエル預言者の思想的世界』、新教出版社、1997年
Boda, Mark J., and Gordon McConville, eds. Dictionary of the Old Testament Prophets. Downers Grove, IL: InterVarsity Press, 2012.

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 10 %
発表 40 %
期末レポート 50 %
※ 授業参加度＝出席
※ 発表＝指定された聖書箇所のプレゼンテーション（30分）
※ 期末レポート＝歴史書の中から問題や課題を自分で発見し、その解決案を論理的にまとめるレポート

＜準備学習等に必要な時間＞

280分

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

一学期間で、一つの研究レポートを作成していただきます。途中、研究計画書の提出、最終講義での研究発表プレゼンテーションを経て、期末レポートとして提出していただきます。講師は、随時フィードバックをして、レポート作成を支援します。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

課題作成のための調査、アイディア出し、資料の翻訳等の利用を認めます。
課題作成のための構成の検討、表現の調整や校正等の利用を認めます。ただし、生成AIの利用プロセスを明示することが求められる場合があります。
利用範囲は担当教員に確認してください。

＜その他履修上の注意点＞

受講にあたって何か気がかりなことがある場合、例えば日本語での読み書きが困難である場合や身体的、精神的健康における懸念がある場合、レポートの書き方がわからない場合など、講師まで伝えてください。柔軟に対応します。
ヘブライ語未履修の学生も受講可能です。
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。

GBS507J　聖書学研究Ⅶ（旧約釈義）

公文　光

2 単位
大学院棟 講義室A
秋 金曜-1限,2限

＜授業の内容とねらい＞

聖書は一生を通して学び続けるべき、深い書物である。そこから学ぶ過程においてまず必要となるのは、１節ずつ正確に読んでいく能力である。本コースはヘブライ語購読・釈義の継続として、聖書記者の意図をより正確に読み取る能力を養うことを目的とする。学生はヘブル語の文法に関する理解を深めるだけでなく、注解書を参考にしつつ著者の意図を理解するスキルの習熟度を高めていくことが期待される。

本年度は第一列王記１７－１９章と伝道者の書１−４章を精読することとする。ヘブライ語の語や句一つ一つの意味を文脈に照らして読む。同時に新改訳の日本語訳を参考にしつつより良い訳の可能性を探っていく。また、パラグラフなど、より広い文脈における神学的な意味など、説教の実践に欠かせないポイントについても触れていく。

本コースは教会教職として講解説教をする予定のある学生を念頭にしている。一人ひとりが教師として自立できるよう、それぞれが自主的に研究することを求める。全体を通して各自のみことばに対する関心が高め、そして普遍的な真実を読み取るセンスを少しでも磨くことを目指す。

＜授業テーマと内容＞

第1週 イントロダクション　I 列王記 17章
第2週 I 列王記 17章
第3週 I 列王記 18章
第4週 I 列王記 18章
第5週 I 列王記 19章
第6週 伝道者の書1章
第7週 伝道者の書2章
第8週 伝道者の書2章
第9週 伝道者の書3章
第10週 伝道者の書4章

＜到達目標＞

聖書釈義の基本的手順に慣れること。そのために、第一に、これまで以上にヘブライ語に慣れ親しみ、それを読む必要性を実感すること。第二に、聖書注解については慎重に読むようになること。第三に、テキストが教える真実とは何か、それを今までよりも少しでも読み取れるようになること。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
B 説得力と表現力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

討議(ディベート)Debate, TCUオンライン, Teams

＜(*)教科書・参考書＞

新聖書注解　第二巻　「列王記」（服部嘉明）　いのちのことば社、1977 年
Expositor’s Bible Commentary:1 Samuel–2 Kings, Tremper Longman ; David E. Garland, genereal eds. Zondervan, 2009
A Time To Tear Down & A Time To Build Up: A Rereading of Ecclesiastes, Michael V. Fox
新聖書注解　第二巻　「伝道者の書」（本間正巴）　いのちのことば社、1975 年

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 10 %
小テスト 10 %
その他 80 %
「その他」では、９回の釈義ノートの提出が義務づけられます。その内容については初回で説明します

＜準備学習等に必要な時間＞

毎回、2〜４時間程度。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

学生は毎回の授業の前に、予習したものを pdf でメールで教官に送り、教官がコメントをつけて返送する。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

利用を認めません。生成AIの利用は不正行為とみなします。

＜その他履修上の注意点＞
受講は、ヘブライ語購読を終了した者に限る。
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。

GBS508J　聖書学研究Ⅷ（福音書）

伊藤 明生

2 単位
大学院棟 講義室A
秋 火曜-3限,4限

＜授業の内容とねらい＞

本科目では、マタイ福音書を中心にして共観表を活用しながら福音書を読んで研究する方法を学ぶことを目指す。福音書は二千年前にギリシア語で書き記され、福音書に描き出されている世界は、紀元1世紀のパレスティナ世界である。同じ出来事を描写する際にも福音書記者たちは、視点や表現など特徴がある。福音書に描かれた世界は、私たちが生かされている現代の日本とは異なる世界であることを十分に意識して、その相違を踏まえて福音書を読み、研究することを修得してもらいたい。マタイの福音書の中程の箇所のギリシア語本文を、主に歴史的・文法的方法論を用いて釈義する。共観表を駆使して共観福音書の並行記事を比較研究して、各福音書の特徴を把握して歴史的文脈の中で位置づけ、その今日的意味を探る。その際、伝統的な歴史批評的方法論や物語論、社会学批評等の方法論の理解の深化を図る。双方向を意識した講義を主体とし、演習の要素を組み入れて学生間の議論を促し、福音書の釈義の技術とセンスの習得を目指す。今年度はマタイの福音書全体の流れを踏まえつつ、最初の10章を読み解きたい。

＜授業テーマと内容＞

第1週 序論： マタイの福音書1章
第2週 マタイの福音書2章
第3週 マタイの福音書3章
第4週 マタイの福音書4章
第5週 マタイの福音書5章
第6週 マタイの福音書6章
第7週 マタイの福音書7章
第8週 マタイの福音書8章
第9週 マタイの福音書9章
第10週 マタイの福音書10章

＜到達目標＞

本特殊研究では、学生が共観表などを活用して福音書のギリシア語本文を読んで研究することを目指す。時代背景を理解するには、ユダヤ教関連の文献をはじめ様々な歴史的な資料などを駆使することも求められる。またグループでの討議・共同を通して協働する態度を養います。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

＜(*)教科書・参考書＞

The New Testament in Its World, Nicholas Thomas Wright and Michael Bird
『共観表』佐藤研
Matthew, Donald Hagner (WBC)
Matthew, W.D. Davies and Dale Allison Jr. (ICC)
Matthew, John Nolland (NIGTC)
Matthew, R.T. France (NICNT)
Matthew, R.T. France (Tyndale)　邦訳あり
The Gospel of Matthew: A Socio-Rhetorical Commentary, Craig Keener
Matthew: Evangelical Biblical Theology Commentary, Charles L. Quarles
Matthew (Exegetical Guide to the Greek New Testament) Charles L. Quarles

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 10 %
リフレクション 10 %
期末レポート 40 %
期末試験 40 %
授業参加は必須で（10%）で、毎回の授業のあとにリフレクションペーパーを書いて送ること（10%）。期末レポートは、マタイの福音書から適宜箇所を選んで釈義レポートを書いて提出すること（40%）。期末試験では、福音書の釈義や研究、マタイの福音書について基礎知識を問う（40%）。

＜準備学習等に必要な時間＞

二コマー回の授業に対して、5〜6時間程度。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

フィードバックを希望する場合には、メールで問い合わせれば、個別に対応いたします。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

＜その他履修上の注意点＞
ギリシア語文法は既習済みで、ギリシア語講読も既習済みであることが望ましい。
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。

GBS509J　聖書学研究IX（パウロ書簡）

岩上　敬人

2 単位
大学院棟 講義室B
冬 火曜-1限,2限

＜授業の内容とねらい＞

本科目は、パウロ神学における義認と聖化について焦点を当てながらローマ人への手紙を講読していきます。まず1世紀ギリシア・ローマ世界における書簡学・古典修辞学から入ります。クラスではパウロ書簡からロマ書の鍵となるテキストを選び、ディカイオス、ハギオスの語彙群を中心に原典釈義を行い、義認と聖化の概念を学びます。学生にはローマ人のテキストと語彙について小レポートを提出してもらい、演習を行ってもらいます。そこから現代のキリスト者と教会における個人と共同体の生活にどのように適用し、今の時代を聖書的に生きていくのかまで広げていきます。This course will be a reading of Paul’s Letter to the Romans with a focus on justification and sanctification. In order to understand the Book of Romans more deeply, we will begin with epistemology and classical rhetoric in the Graeco-Roman worlds. Our class will select key texts from Paul's letters to the Romans and study the concepts of justification and sanctification through exegesis of the original texts, focusing on the vocabulary of dikaios and hagios.

＜授業テーマと内容＞

第1週 イントロダクション：古代書簡学・修辞学
第2週 パウロの回心と神学的基礎付け
第3週 ローマ人への手紙の歴史的背景・書全体の分析・文学的構造
第4週 ローマ人への手紙１～２章
第5週 ローマ人への手紙３～４章・演習①
第6週 ローマ人への手紙５～６章・演習②
第7週 ローマ人への手紙７～８章・演習③
第8週 ローマ人への手紙１２～１５章・演習④
第9週 ローマ人への手紙の神学的要約・演習⑤
第10週 総括: ローマへの手紙から現代の神学的諸課題
本科目は、パウロがまだ訪れたことがないコロサイの教会に書き送った手紙をひとつの例として取り扱って、他のパウロ書簡を読み解く糸口とする。コロサイの町は、パウロが手紙を書き送った、比較的直後に地震に被災して甚大な被害を蒙って、住民たちは避難して町は廃墟化したので、一世紀当時のコロサイの町を偲ぶことは難しいが、近年になってようやく考古学的な発掘も始められた。獄中書簡のひとつであるが、パウロの真筆か否か議論がある。パウロは、コロサイ教会を開拓したエパフラスと獄屋生活で一緒となり、コロサイの教会を荒廃させている間違った教えのことを聞かされて、コロサイ書で論敵たちの反駁を試みている。コロサイの異端の特定については様々な仮説が提案されているが、禁欲主義的な側面があり、しかも御使いを礼拝する面もあり、ひとつの異端集団に集約できるかが課題である。パウロの主要な議論は、キリスト論が中心となっている。キリストは見えない神の見える形で、自ら造り主でもあったので、堕落した被造世界も創造の当初、善かつ潔なるものであった！すべての知恵はキリストのうちにあり、すべての問題を解決する糸口はキリストに秘められている。

＜到達目標＞

①パウロ書簡を読むための古典書簡学、古典修辞学を理解する。
②ローマ人への手紙の歴史的背景・執筆目的・聴衆を理解する。
③ローマ人への手紙を原語で読み、釈義、解釈する。
④ローマ人への手紙に書かれている「義」と「聖」の概念を理解する。
⑤原語（ギリシア語・ヘブル語）の語彙研究を行い、それを演習でプレゼンテーションできるようになる。
⑥N. T.
ライトを始めとする近年の新約聖書学の義認論と伝統的な義認理解を区別し、聖書から整理し、統合的に理解できるようになる。
⑦ローマ人への手紙の義と聖を、現代の教会でどのように生きるのかを考え、個人の生活にも適用する。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

＜(*)教科書・参考書＞

Novum Testamentum Graece Nestle-Aland 28. revidierte Auflage (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellshcaft, 2012)
J. D. G. Dunn, Romans 1-8 Word Biblical Commentary. (Dallas: Word Books 1988)
C. E. B. Cranfield, A Critical Exegetical Commentary on the Epistle to the Romans. 2 vols. International Critical Commentary (Edinburgh: T & T Clark, 1975)
Douglas Moo, The Epistle to the Romans The New International Commentary on the New Testament. (Grand Rapids: Eerdmans, 1996)
Richard N. Longenecker, The Epistle to the Romans The New International Greek Testament Commentary. (Grand Rapids: Eerdmans, 2016)
Ben Witherington III, Paul's Letter to the Romans A Scoio-Rhetorical Commentary. (Grand Rapids: Eerdmans, 2004)
岩上敬人『パウロの生涯と聖化の神学』（東京、JHA出版、2010年）
N. T. ライト『使徒パウロは何を語ったのか』（東京、いのちのことば社、2017年）
J. D. G. ダン『使徒パウロの神学』（東京、新教出版、2019年）

＜成績評価の方法と基準＞
授業参加度 20 %
課題 20 %
発表 20 %
期末試験 40 %
授業に参加し、ディスカッション等に積極的に参加する（20%)、ローマ人への手紙のテキスト、語彙について釈義ペーパーを書く（20%)、釈義レポートをクラスで発表すること（20%)、釈義レポートを土台として期末レポートを書くこと（40%）

＜準備学習等に必要な時間＞
2コマ1回の授業のために1時間の予習と1時間の復習が望ましい。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞
フィードバックを希望する場合には、メールで問い合わせくだされば、個別に対応させていただく。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞
課題作成のための調査、アイディア出し、資料の翻訳等の利用を認めます。

＜その他履修上の注意点＞
机上の学びに偏らないように、できる限り学生生活、教会生活、奉仕等に適用させることを心掛けます。特にパウロの義と聖は、個人・共同体生活の中で具現化するものなので、他者への共感的理解、他者との協働が実践的な鍵となります。
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。

GBS510J 聖書学研究X（新約釈義）

伊藤 明生

2 単位
教研棟２Ｆ 小教室１
冬 水曜-3限,4限

＜授業の内容とねらい＞
本科目では、新約聖書釈義の基本の方法の研究をヘブル人への手紙に適用して、旧約聖書の使用に注目する。履修者はヘブル人への手紙の該当箇所をギリシア語で読み、分析することを通して、本文批評、文法の分析、語の分析、間テクスト性等の知識を深める。履修者は、授業内発表をし、ヘブル人への手紙の箇所とそれにおける旧約聖書の使用を徹底的に分析する釈義レポートを作成する。

In this course, the basic methods of New Testament exegesis will be applied in the study of Hebrews with special attention to use of the Old Testament. Enrolled students will deepen understanding of the methods of textual criticism, grammatical analysis, lexical analysis, intertextuality, etc., through reading and analyzing passages of Hebrews in Greek. Students will give presentations in class and write an exegesis report thoroughly analyzing a text of Matthew and its use of the Old Testament.

＜授業テーマと内容＞
第1週 ヘブル人への手紙の緒論と第1章
第2週 ヘブル人への手紙第2章
第3週 ヘブル人への手紙第3章
第4週 ヘブル人への手紙第4章
第5週 ヘブル人への手紙第5章
第6週 ヘブル人への手紙第6章
第7週 ヘブル人への手紙第7章
第8週 ヘブル人への手紙第8章
第9週 ヘブル人への手紙第9章
第10週 ヘブル人への手紙第10章

＜到達目標＞
・新約聖書釈義の方法（本文批評、文法の分析、語の分析、旧約聖書の使用の研究等）の基本知識を深める。
・中級のレベルでギリシア語の新約聖書を読み、その文法を分析する。
・新約聖書の箇所を研究することによって学んだ研究法方を適用する能力を証明する。

＜DPとの関連＞
A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
B 説得力と表現力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞
対面授業

＜授業方法＞
グループ学習(ワーク・ディスカッション), 発表(プレゼンテーション）, 討議(ディベート)Debate, TCUオンライン

＜(*)教科書・参考書＞
* Barbara Aland, Kurt Aland, Johannes Karavidopoulos, Carlo M. Martini, Bruce M. Metzger, Novum Testamentum Graece, 28th ed. (Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2012) (Nestle-Aland 28版)
* Holger Strutwolf, Hugh Houghton, Christos Karakolis, David Parker, Stephen Pisano, David Trobisch, Klaus Wachtel (eds), The Greek New Testament
* Daniel B. Wallace, Greek Grammar Beyond the Basics: An Exegetical Syntax of the New Testament (Grand Rapids: Zondervan, 1997)
* Gareth Lee Cockerill, Epistle to the Hebrews (NIC)
Sigurd Grindheim, The Letter to the Hebrews (Pillar New Testament Commentary)
Philip Edgcumbe Hughes, A Commentary on the Epistle to the Hebrews
William L. Lane, Hebrews 1–8 & Hebrews 9–13 (WBC)
Harold W. Attridge (Hermeneia)
Paul Ellingworth, The Epistle to the Hebrews（New International Greek Testament Commentary）
川村輝典『ヘブル人への手紙：聖書註解』

＜成績評価の方法と基準＞
授業参加度 10 %
リフレクション 10 %
期末レポート 40 %
期末試験 40 %
課題は授業内で発表される。

＜準備学習等に必要な時間＞
140分授業に対して少なくとも280分の授業外学習時間が望ましい。授業外学習は以下の通りである：
１．事前に教科書及び参考資料の該当箇所を読んでくる。
２．発表レジュメを作成する。
３．授業で文法等を分析できるように事前にギリシア語の新約聖書の箇所を予習する。
４．レポートを作成する。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞
採点の上返却する。または、口頭の場合はその場で解説を加えた上で解答の正誤を示す。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞
課題作成のための調査、アイディア出し、資料の翻訳等の利用を認めます。
課題作成のための構成の検討、表現の調整や校正等の利用を認めます。ただし、生成AIの利用プロセスを明示することが求められる場合があります。

＜その他履修上の注意点＞
以上の参考書の他、講義の中で適宜紹介する。

Daniel B. Wallace, Greek Beyond the
Basicsは織田昭『新約聖書のギリシア語文法』より使いやすいので、英語ができる履修者はWallaceだけを使っても良い。

合理的配慮が認められた場合、課題及びレポートの提出期限を延長することが可能となります。
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。

GRS610J　神学研究の基礎

岡村 直樹
伊藤 明生 / 齋藤 五十三 / David Sytsma / 公文 光

2 単位
大学院棟 講義室C
春 月曜-3限,4限,5限,6限

＜授業の内容とねらい＞

本科目では、「実践神学」「旧約学」「新約学」「組織神学」「歴史学」の５つの分野における研究の方法や課題について学びます。初回の授業では、修士論文執筆に関する基礎的な学びを行い、その後、実践神学の意味やそのための方法論について学びます。旧約学では、前半に福音主義に基づく聖書研究の性格、研究領域、ツールについての解説を行います。後半は律法から一箇所、預言書から一箇所を選び、聖書研究の実際においてどのようなことがかかわり、解釈者はどのようなことに着目すべきかについて、質問、ディスカッション等を通して学びます。新約学では、福音書と書簡から1箇所づつ選んで釈義を講義した上で、各自で新約聖書から1箇所を選んで釈義を実際行います。組織神学では、神学諸科における組織神学の位置づけ・目標を示した上で、研究方法や問題の設定の方法を確認し、グループディスカッション等を通して深めます。歴史学では、教会史の方法論や問題等について講義と演習を通して取り組みます。学生はそれぞれの研究に相応しい研究方法について考察しつつ、オンラインリソースについても学びます。

＜授業テーマと内容＞

第1週 実践神学
第2週 旧約聖書学
第3週 新約聖書学
第4週 組織神学
第5週 歴史神学
第10週　　曜日、時限が変則的ですので注意ください。

＜到達目標＞

（１）クラスに於いて紹介された「聖書学」と「神学・教会」各領域における文献の内容を理解すること。
（２）それぞれの領域における基本課題、及び神学研究のための必要な諸方法論を理解し、修士論文作成に向けた取り組みを開始すること。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

グループ学習(ワーク・ディスカッション), 発表(プレゼンテーション）, 討議(ディベート)Debate, TCUオンライン

＜(*)教科書・参考書＞

T.D. Alexander & D.W. Baker (eds.), Dictionary of the Old Testament: Pentateuch. Downers Grove: InterVarsity Press, 2002.
W.G. キュンメル (高橋敬基訳) 『20世紀における新約聖書ー新約聖書研究概説』 日本基督教団出版局，1973年。
Bruce McCormack & Kimlyn J. Bender (eds.), Theology as Conversation: The Significance of Dialogue in Historical and Contemporary Theology. Grand Rapids: Eerdmans, 2009.
棚村重行 『二つの福音は波濤を越えて』教文館，2009年。
Robert W. Pazmino, Doing Theological Research: An Introductory Guide for Survival in Theological Education. Eugene: Wipf & Stock, 2009.

＜成績評価の方法と基準＞

リフレクション 100 %
リアクションペーパーを提出。
内容は、各教員担当の演習で、新に発見したこと、何を学んだか、自らの研究との関係で考えたこと、考えさせられたこと。フォントサイズは10ポイントで、A4数枚程度に収める。
提出締切り：5月末日　　提出先：教務部

＜準備学習等に必要な時間＞

クラス時間の約２倍の時間（約４～５時間）を、毎週のクラスの準備や復習のために用いること。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

ゼミ形式の科目であり、学生と教員のインターアクションを通して、意見交換やフィードバックが行われます。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

課題作成のための構成の検討、表現の調整や校正等の利用を認めます。ただし、生成AIの利用プロセスを明示することが求められる場合があります。

＜その他履修上の注意点＞
修士論文、または修士プロジェクトに取り組むために必要なクラスです。
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。

GRS651J　説教演習Ⅰ

菊池　実

2 単位
大学院棟 講義室B
通年 水曜-1限

＜授業の内容とねらい＞
本講は、説教の基本（黙想、釈義、展開、対象への配慮、伝え方）、そして展開・応用の実際的な演習としての位置づけを持ちます。 前半は指定されるテキストからの講解説教、後半は指定される主題（伝道、元旦礼拝、イースター、母の日、子供祝福式など）について演習を行います。　説教演習者は、事前に説教題を考え、応答の賛美を選択し、対象を想定して当日に臨みます。　聖書釈義と黙想をとおして作成した説教原稿に基づき、自然に演述する技能を身に着けるために、他者からの評価を通して学びます。「原稿を読む」ことで責任が果たされるのでなく、講壇に立つこと、服装、心持ち、発声、冒頭の言葉、視線、間、時に手振りなども含めて、主の言葉の奉仕者の姿を目指します。　聴く側にあっては、御言葉の傾聴者として健徳的な説教批評の能力を養うとともに、それを自らの説教に役立てることを目指します。　毎回、受講生と教員とで説教批評を行います。
説教した学生は受けた評価に対してコメントし、共に学び合います。

＜授業テーマと内容＞
第1週 オリエンテーション：本講の目的。演習での留意点。説教批評の仕方。講解説教創世記
第2週 講解説教　創世記
第3週 講解説教　創世記
第4週 講解説教　創世記
第5週 講解説教　創世記
第6週 主題説教　創立記念礼拝、イースター礼拝
第7週 主題説教　ペンテコステ礼拝、召天者記念礼拝
第8週 主題説教　賛美礼拝、クリスマス礼拝、葬儀司式と説教
第9週 主題説教　新年礼拝、信教の自由を守る日の礼拝
第10週 祝祷（受講者全員）
・登録者が確定した時点で全２０回（実質１８回）の演習担当者を名簿順に決定し、初回に発表します。
・演習者は事前に想定する教会の規模、選曲した応答讃美、聖書箇所、説教題、氏名を板書。実際の演習（説教）は17分まで。聴衆となる学生は評価書をその場で記入し、それに基づいてコメントします。そのコメントも評価の対象となります。

＜到達目標＞
聖書本文の釈義に基づく説教、信仰的な実存に迫る説教とすること。原稿を用いつつも、自分の言葉で自然に、誠実と熱意をもって語ること。また、実際の伝え方、伝える者の姿とを一歩ずつ（相互に）確立することを目標とします。また、主題説教の組み立ての力を養うことも大事な目標とします。なによりも、演習によって自らが神の言葉の説教に聴く者となり、語る者とされることが大事な目標です。

＜DPとの関連＞
B 説得力と表現力

＜授業形態＞
対面授業

＜授業方法＞
発表(プレゼンテーション)

＜(*)教科書・参考書＞
C. H. スポルジョン 『新版　説教学入門』 いのちのことば社，2010年。
加藤常昭 『説教批判 説教分析』 教文館，2008年。
トム・ウィルキンソン 『キリスト中心の講解説教』 一麦出版社，2007年。
藤原導夫他 『福音主義神学』29号 日本福音主義神学会，1998年。
Bryan Chapell, Christ Centered Preaching. Grand Rapids: Baker 1994.

＜成績評価の方法と基準＞
授業参加度 20 %
課題 20 %
発表 50 %
その他 10 %
・演習（年に2回予定）は50%
・出席（20%）とともに、毎回の演習者に対するコメントや参加も評価の対象となります（その他：10%）。
・年度末に提出するレポート（クラスノートとまとめ）とは、毎回の（他の人の）演習において自分が学んだこと（相互の評価、教師のコメント）を記録するノートであり、最後のクラスで自身のまとめとともに提出します。1年を通して自身が学んだことを自身の言葉で主の前にまとめます。重視されます。（20%）

＜準備学習等に必要な時間＞
・説教をする場合には15～10時間、毎回は説教批評のために1時間ほど釈義的準備

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞
・毎回演習者に対して受講者全員が評価書を記入し、代表者数名が評価を述べます。担当教員はそれらの評価を受けて改めて演習者の演習に対してコメントをして演習者へのフィードバックとします。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

＜その他履修上の注意点＞

・年20回不定期開講（要日程確認）。受講生は毎回評価書記入をします。評価も評価の対象となります。時間と同時に開始します。演習者は相応しい服装で臨んでください。主題説教は構成と要素を考え、講解で終わらないように努めて下さい。

・対面授業のみ

GRS652J　説教演習 II

齋藤　五十三
山口 陽一

2 単位
大学院棟 講義室C
通年 水曜-2限

＜授業の内容とねらい＞

今年度は山口・齋藤が本説教演習を担当します。
大学院の最終学年の説教演習として、求道者を含む教会の会衆を意識した説教を準備して下さい。旧約聖書、新約聖書から一人1回づつ、2回の説教機会を設けます。テキストを指定しますので、十分に釈義し、連続ではない一回完結の講解説教を用意して下さい。
説教者は、前日までに「説教原稿」をTeamsにアップして下さい。教員はこれを確認してTCUオンラインにアップして全員に共有します。説教の時間は20分、聖書朗読を行い、説教前の祈りをしてから説教してください。説教後の祈りもしてください。説教後10分ほど時間を取りますので、説教者以外の受講生は説教批評用紙に記入して下さい。その後、説教批評を全員が口頭で行ないます。批評Teamsにアップして下さい。教員は説教と説教批評の総評を行います。最後に説教者は感想と反省・改善点などを述べて下さい。
教会での説教を想定し、釈義的であり、初心者にもわかりやすく、適用を加えた説教をしてください。説教者以外の受講生は、以上をふまえた説教批評をしてください。
釈義と構成、黙想の訓練のため、このクラスでの生成AIの使用は禁止します。

＜授業テーマと内容＞

第1週　マルコの福音書からの説教演習
第2週 マルコの福音書からの説教演習
第3週 マルコの福音書からの説教演習
第4週 マルコの福音書からの説教演習
第5週 マルコの福音書からの説教演習
第6週 旧約聖書からの説教演習
第7週 旧約聖書からの説教演習
第8週 旧約聖書からの説教演習
第9週 旧約聖書からの説教演習
第10週 旧約聖書からの説教演習 説教者は、自分の説教を録音して聴き直すことを推奨します。

＜到達目標＞

説教に臨む態度が「神のことばを語る」に相応しいものであり、聖書釈義が正確であり、論理的構成がしっかりしていることは大前提です。それに加えて、説教としてインパクトがあり、聴く人を動かし記憶に残る説教であることをめざします。教会教職者として教会に赴任するために説教者として整えられることを目標とします。

＜DPとの関連＞

B 説得力と表現力

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

発表(プレゼンテーション）, 討議(ディベート)Debate

＜(*)教科書・参考書＞

C.H.スポルジョン『説教学入門』いのちのことば社
加藤常昭『説教論』日本キリスト教団出版局
M.ロイドジョンズ『説教と説教者』いのちのことば社
大島重徳『若者に届く説教』教文館
朝岡勝『説教の聴き方』教文館、2025年

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 20 %
リフレクション 20 %
発表 60 %
授業に遅れず参加し、説教者の課題を出し、2回以上の説教（発表）を行うこと、説教に対する批評を（リフレクション）として評価します。

＜準備学習等に必要な時間＞

説教者は聖書テキストを読み、調べ、説教黙想を繰り返し、説教原稿を書いて演習に備えるために、2〜3週間以上、実質8時間以上をかけること。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

教員も批評用紙に批評を記入しTeamsにアップします。口頭でも批評を述べます。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

利用を認めません。生成AIの利用は不正行為とみなします。

＜その他履修上の注意点＞

説教は時間ピッタリに始めます。説教者は10分以上前、受講生は5分以上前に着席して静まる時をもって下さい。担当するテキスト、その他の詳細はクラスで配付します。最初のクラスの3週間以上前にTCUオンラインにアップします。

対面授業のみ

GRS661J　実践神学演習 I

岡村 直樹

2 単位
大学院棟 講義室A
通年 金曜-5限,6限

＜授業の内容とねらい＞

本科目は、学生の教会経験に基づき、神学上の学識を応用する際の諸問題を取り扱い、教会教職に関する理解を深め、実践的応用能力を修得することを目指します。このクラスでは、質的な人間研究を基礎に、ミニストリーにおける自分理解、および他者理解の重要性を確認します。その上で、世代を超えた共同体として存在すべき教会のあり方を見据えつつ、教会運営における自己理解と人間理解、そして協働について学びます。またインタビューやグループディスカッション等を通して、教会教職者に必授な問題分析力と解決能力についての理解を、認知行動療法の観点等を参考に深めます。本科目のもうひとつの目標は、学外の様々なミニストリーの諸分野の専門家（ユースミニストリー、大学生ミニストリー、霊的形成、臨床心理）の意見に耳を傾けることを通して見聞を広げることです。本科目は演習授業であり、学生の主体的な授業参加による学びが中心に据えられています。

＜授業テーマと内容＞

第1週 イントロダクション
第2週 教会生活ついて
第3週 教会生活について
第4週 インターンシップ計画
第5週 インターンシップ報告
第6週 インターンシップ報告
第7週 特別講義
第8週 特別講義
第9週 特別講義
第10週 特別講義

＜到達目標＞

教会教職者として、幅広く学びつつ、時に牧会という場面での対人能力（対話能力や傾聴能力等）を身につけ、将来のミニストリーに備えます。また学外の様々な神学の専門家の意見に耳を傾けることを通して見聞を広げます。

＜DPとの関連＞

B 説得力と表現力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

＜(*)教科書・参考書＞

Gary A. Parrett and S. Steve Kang, Teaching the Faith, Forming the Faithful: A Biblical Vision for Education in the Church. Downers Grove: IVP Academic, 2009.
Mark H. Senter III, When God Shows Up: A History of Protestant Youth Ministry in America. Grand Rapids: Baker Academic, 2010.
Peter L. Scazzero and Warren Bird, The Emotionally Healthy Church. Grand Rapids: Zondervan, 2010.

＜成績評価の方法と基準＞

課題 30 %
発表 30 %
期末レポート 40 %
合同演習を含みます。

＜準備学習等に必要な時間＞

クラス時間の約２倍の時間（約４～５時間）を、本クラスのために用いる毎週の学習時間とすること。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

年間を通した多様な取り組みに対して、学生同士の相互評価に加え、学生自身の自己評価、そして教員からの評価を、クラス内での課題発表時に受ける。

対面授業のみ

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

課題作成のための構成の検討、表現の調整や校正等の利用を認めます。ただし、生成AIの利用プロセスを明示することが求められる場合があります。

＜その他履修上の注意点＞
教会教職コースの必修科目です。

GRS662J　実践神学演習 II

山口 陽一

2 単位
大学院棟 講義室C
通年 金曜-5限,6限

＜授業の内容とねらい＞

本科目では毎週の教会実習の体験をクラスに持ち帰り、相互に検討します。学部の教会教職課程「実践神学ゼミ I II」、大学院の「実践神学演習 I」の延長線上に位置し、学年担任による4年目クラスです。最終学年として「教会教職者として赴任に備える」ことをねらいとします。学生は互いに情報交換をして、クラスの霊的形成にも寄与することをめざしています。実習の報告と討議にはテーマを設けています。ここまでに培ってきた神学（聖書学・組織歴史神学・実践神学）の学びと実践の統合をめざします。詳細はクラスで相談して決定します。年2回、教会教職課程4学年合同のクラスがあり、他数人のゲストをクラスに招きます。以上の内容とねらいから出席は必須です。通年で授業日が不定期なので注意して下さい。この科目は、私の日本同盟基督教団と日本基督教団での牧師としての40年の働きと、神学教師・代務牧師として22年間続けている教会等での説教及び講演・懇談、日本同盟基督教団理事6年、日本福音同盟神学委員10年余などの経験を活かして提供しています。個人的な相談はメール、オフィスアワーその他でも対応します。

＜授業テーマと内容＞

第1週 教会教職課程4学年合同クラス（静まり）※週は移動する可能性があります。
第2週 礼拝と礼典：伝統と多様性について討論、週報・礼拝式次第、チャペルの司会準備
第3週 葬儀の備え（ゲスト）※週は移動する可能性があります。
第4週 地域福祉と教会（ゲスト）※週は移動する可能性があります。
第5週 教会の運営：役員会（長老・執事会）など教会の組織、運営について
第6週 教会の宣教：伝道と社会的政治参与の責任（ローザンヌ誓約）
第7週 教会の教育：どのようにして人を育てるか
第8週 教会実習を振り返って（牧会理念と牧師像、まとめ）
第9週 赴任に備える（ゲスト）※週は移動する可能性があります。
第10週 教会教職課程4学年合同クラス（メンタルケア）

＜到達目標＞

学生は、ここまで3年間あるいは5年間の教会実習により、教会の働きについて相当に多くの経験をしている。これらを十分にふまえ、教会教職者としての基本的な姿勢を身につけること。また、自分と違う立場の人とコミュニケーションし、協働できる能力を身につけること。教会教職者として教会に赴任する準備の演習です。

＜DPとの関連＞

B 説得力と表現力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

＜(*)教科書・参考書＞

リチャード・ボウカム『聖書と政治』いのちのことば社、2017年
水草修治『新・神を愛するための神学講座』地引網出版、2022年
ウィリアム・ウィリモン 『牧師　その神学と実践』 新教出版社，2007年。
山崎龍一『教会実務を神学する』教文館、2021年
朝岡勝『教会に生きる喜び』教文館、2018年

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 20 %
リフレクション 20 %
発表 20 %
期末レポート 40 %
リフレクションと合わせて授業参加を重視します。中間レポートは発表に基づくものです。期末レポートは「牧師像と牧会理念」です。

＜準備学習等に必要な時間＞

教会実習時間は5～20時間、討論のまとめ、発表準備等のために、平均週1～2時間

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

リフレクション、レポートに対してコメントします。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

＜その他履修上の注意点＞
教会生活、奉仕を前提としています。

対面授業のみ

GRS671J　神学インターンシップⅠ(教会実習)

伊藤 明生

2 単位
学外
通年

＜授業の内容とねらい＞

本科目は、前期課程一年次の夏期休暇中の3週間、教会（関連施設）に滞在し、教会と教会教職者の働きの実際を学ぶ教会教職コースの必修科目である。インターンシップ先教会において、指導教師の監督の下教会活動に参加し、アドバイスを受けながら実習経験を積む。さらにこれを大学院での神学の学修に生かすことをねらいとする。

〔実習先選定・実習計画〕所属教会牧師と相談の上、それぞれの必要や将来の働きを考慮し決定する。教会での実習を基本とするが、福祉施設やホスピスなども指導教師がいれば可とする。一か所でも複数か所でも構わないが、多くても3か所程度とする。
事前に滞在や実習に関してインターンシップ先の指導教師と打ち合わせを行い、実習計画を立てる。

〔実習中〕期間中は指導教師の指導に従う。必要経費は自弁する。

＜授業テーマと内容＞

＜到達目標＞

学期中の教会実習では経験できない週日の教会活動と教会教職者の働きを知り、これを教会教職者としての実践的な学びに反映させる。インターンシップを通して新しい体験をし人間関係を築くことが教会教職者としての人格形成につながることを期待している。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
B 説得力と表現力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

＜授業方法＞

＜(*)教科書・参考書＞

＜成績評価の方法と基準＞

その他 100 %
評価はP（Pass）またはNP(Non-Pass)にて判定する。
インターンシップ先の選定を含む事前準備、指導教師からの「神学インターンシップ評価票」、インターンシップ後のレポートにより総合的に評価する。
その他、実践神学演習Ⅰの授業にて報告会を実施する。

＜準備学習等に必要な時間＞

インターンシップ受入れ先の準備を考慮し、早めに交渉を開始し、４～５月頃には受け入れ先を決定すること。実習内容について事前に情報を十分に交換しておくこと。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

問題があれば、連絡する。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

＜その他履修上の注意点＞

GRS672J　神学インターンシップⅡ(夏期伝道)

伊藤 明生

2 単位
学外
通年

＜授業の内容とねらい＞
夏期休暇中の10日間に実施される夏期伝道に参加し、仕える者としての姿勢を学ぶ。
夏期伝道はチームで寝食を共にする活動であり、派遣先教会や協働作業から多くを学ぶとともに、人間関係の構築や修復も期待される。
夏期伝道の準備から仕える者の姿勢に関する実践的な訓練を受け自己評価し、自分の資質、得意不得意を理解し、教会教職者としての自己形成とその後の神学の学びに生かすことをねらいとする。
夏期伝道そのものが、たとえば震災被災地での支援活動など地域教会を通しての社会貢献の意味合も持っており、これへの参加も一つのねらいである。
※祈りのメンバーでの参加は履修の対象としない。

＜授業テーマと内容＞

＜到達目標＞
夏期伝道に全期間参加することで教会とチームに貢献し、チームの協働におけるリーダーシップを学ぶ。これを通して自身の資質を知り、仕えるリーダーシップを考え自覚する。またその後の神学の実践的研鑽につなげる。

＜DPとの関連＞
A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
B 説得力と表現力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

＜授業方法＞

＜(*)教科書・参考書＞

＜成績評価の方法と基準＞
その他 100 %
評価はP（Pass）またはNP(Non-Pass)にて判定する。
夏期伝道全期間の参加に加え、帰着後のレポートによって評価する。

＜準備学習等に必要な時間＞
夏期伝道開始前の事前準備から事後の活動にまで参加すること。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞
問題があれば、連絡する。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

＜その他履修上の注意点＞
神学インターンシップⅡ/Ⅲは一年次(神学インターンシップⅡ)と二年次（神学インターンシップⅢ）の二度にわたって履修することができる。

GRS673J　神学インターンシップIII(夏期伝道)

伊藤 明生

2 単位
学外
通年

＜授業の内容とねらい＞

夏期休暇中の10日間に実施される夏期伝道に参加し、仕える者としての姿勢を学ぶ。
夏期伝道はチームで寝食を共にする活動であり、派遣先教会や協働作業から多くを学ぶとともに、人間関係の構築や修復も期待される。
夏期伝道の準備から仕える者の姿勢に関する実践的な訓練を受け自己評価し、自分の資質、得意不得意を理解し、教会教職者としての自己形成とその後の神学の学びに生かすことをねらいとする。
夏期伝道そのものが、たとえば震災被災地での支援活動など地域教会を通しての社会貢献の意味合も持っており、これへの参加も一つのねらいである。
※祈りのメンバーでの参加は履修の対象としない。

＜授業テーマと内容＞

＜到達目標＞

夏期伝道に全期間参加することで教会とチームに貢献し、チームの協働におけるリーダーシップを学ぶ。これを通して自身の資質を知り、仕えるリーダーシップを考え自覚する。またその後の神学の実践的研鑽につなげる。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
B 説得力と表現力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

＜授業方法＞

＜(*)教科書・参考書＞

＜成績評価の方法と基準＞

その他 100 %
評価はP（Pass）またはNP(Non-Pass)にて判定する。
夏期伝道全期間の参加に加え、帰着後のレポートによって評価する。

＜準備学習等に必要な時間＞

夏期伝道開始前の事前準備から事後の活動にまで参加すること。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

問題があれば、連絡する。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

＜その他履修上の注意点＞

神学インターンシップⅡ/Ⅲは一年次(神学インターンシップⅡ)と二年次（神学インターンシップⅢ）の二度にわたって履修することができる。

GTC501J 神学･教会研究 I （人間理解とミニストリー）

岡村 直樹

2 単位
大学院棟 講義室C
春 木曜-3限,4限

＜授業の内容とねらい＞

ミニストリー（diakonea）とは、神と人に仕えることを意味するギリシャ語です。神を知らなくては神に仕えることはできないのと同じように、人を知らなくては人に仕えることはできません。宗教改革者カルヴァンは、「神を知ることなくして、自分を知ることはできない。自分を知ることなくして、神を知ることはできない。（Institute 1.1.2-3）」と語りましたが、ミニストリーに関わる者が、自らを霊的に、また心理的に知ることは必要不可欠であると言えます。さらに教会というコンテキストにおける対話について考察し、ケアを主眼においた「対話スキル」を身につけます。一方向的な「お話し」でも、人に影響を与えることはできますが、ケアを必要としている人には、その人特有の必要があり、また「聞いてもらいたい」という思いが強く起こります。そのため、ケアを成立させるには、ケアをする人とされる人が出会い、ケアの目的にかなう、良い関係性が作られることが重要です。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」（マタイ11章）という御言葉を念頭に、現代の教会におけるケアについて考えます。

＜授業テーマと内容＞

第1週 ミニストリーの意味
第2週 自分の感情を知る
第3週 ライフヒストリーを通して自分を知る
第4週 親との関係性を通して自分を知る
第5週 「私のトリセツ」の作成
第6週 自分の対話スタイルを知る
第7週 ケアの対話の基礎①
第8週 ケアの対話の基礎②
第9週 ケアの対話の応用①
第10週 ケアの対話の応用②

＜到達目標＞

１）ミニストリー従事者である自分自身を理解し受け入れること。
２）ミニストリーの対象者である人間を理解するためのツールを獲得すること。
３）教会における他者理解を深めるための具体的な方策を準備すること。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
B 説得力と表現力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

グループ学習(ワーク・ディスカッション), 発表(プレゼンテーション）, 討議(ディベート)Debate, TCUオンライン, Teams

＜(*)教科書・参考書＞

＊日常の神学、岡村直樹、いのちのことば社、2023年

＜成績評価の方法と基準＞

課題 30 %
発表 30 %
期末レポート 40 %
各レポートの評価のポイントは、正直さ、分かりやすさ、具体性、ユーモアです。

＜準備学習等に必要な時間＞

クラスの復習や課題のために用いる学習時間は、毎週のクラス時間の約１．５倍を目安とします。このクラスの毎週の授業時間は１４０分ですので、クラス外で毎週約２１０分の学習時間を確保して下さい。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

各課題は授業時に発表していただき、その場で教員、そしてクラスメートとの意見交換やリフレクションを実施します。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

課題作成のための構成の検討、表現の調整や校正等の利用を認めます。ただし、生成AIの利用プロセスを明示することが求められる場合があります。

＜その他履修上の注意点＞

教科書を購入し、クラスにご持参ください。
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。
本科目は、「どこでもTCU」対象科目です。正規生以外の参加の可能性があります。

GTC502J 神学･教会研究 II （キリスト教と教育）

岡村 直樹
徐 有珍

2 単位
大学院棟 講義室C
冬 金曜-1限,2限

＜授業の内容とねらい＞

日本の公教育における宗教教育に関する議論や研究を対象とする「宗教教育」とは異なり、欧米の多くの高等教育機関において確立した学問である「宗教教育学(Religious_Education)」は、宗教の概念、教義、儀式、習慣、歴史等の伝達プロセスやその方法論等を取り扱います。前半は、講義形式で宗教教育学の歴史的背景と全体像を把握しつつ、今日における宗教教育学的視点の有用性や課題について理解を深めます。後半は、宗教教育学研究の第一人者であるメリー・エリザベス・モアーが提唱する５つの宗教教育方法論と、それらの実践的取り組みについて演習形式で学びます。（モアーは「開かれた教育」「開かれた教育者」の必要性を主張する今日の北米における宗教教育の牽引者の一人です。彼女の唱える真の教育者の姿とは、既成概念に縛られる事なく、世界で起こる様々な出来事に生徒の目を向けさせ、教育の対象である生徒との関係性を重視しつつ、自らも彼らからも学ぼうと心がけ、常に新しい学びの可能性に目を向ける教育を行う教育者です。）

＜授業テーマと内容＞

第1週 なぜ宗教教育なのか
第2週 「多様性と課題」受講生発表とディスカッション
第3週 宗教教育と環境①
第4週 宗教教育と環境②
第5週 教育構造の多様性と移り変わり
第6週 宗教教育の方法論①：プロセス現象学的方法論
第7週 宗教教育の方法論②：ナラティブ・メソッド
第8週 宗教教育の方法論③：デベロップメンタル・メソッド
第9週 新しい宗教教育プログラムの構築①
第10週 新しい宗教教育プログラムの構築②

＜到達目標＞

（１）宗教教育学という学術分野の歴史的背景とその全体像を把握し、キリスト教におけるその位置を理解すること。
（２）メリー・エリザベス・モアーが提唱する５つの宗教教育方法論と、それらの実践的取り組みについて理解すること。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
B 説得力と表現力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

グループ学習(ワーク・ディスカッション), 発表(プレゼンテーション）, 討議(ディベート)Debate, TCUオンライン, Teams

＜(*)教科書・参考書＞

岡村直樹 「メリー・エリザベス・モアーのプロセス現象学的教育論とその展開」『キリスト教教育論集』
日本キリスト教教育学会，2011年，29～46頁。
Naoki Okamura, “Intercultural Encounters as Religious Education.” The Journal of the Religious Education 104. May-June 2009, pp. 289-302.
Thomas H. Groome, Christian Religious Education. New York: John Wiley
& Sons, 1999.
Robert W. Pazmino, Principles and Practice of Christian Education. Eugene: Wipf and Stock Publishers, 2002.
M. E. Moore, Teaching From Heart: Theology and Educational Method. Valley Forge: Trinity Press International, 1998.

＜成績評価の方法と基準＞

課題 30 %
発表 30 %
期末レポート 40 %
すべての課題は、授業時の相互発表の対象となります。

＜準備学習等に必要な時間＞

クラス時間の約２倍の時間（４～５時間）を、本クラスのために用いる毎週の学習時間とすること。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

授業時の相互発表を通して、クラスメートや教員からのフィードバックを受けます。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

課題作成のための構成の検討、表現の調整や校正等の利用を認めます。ただし、生成AIの利用プロセスを明示することが求められる場合があります。

＜その他履修上の注意点＞
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。
本科目は、「どこでもTCU」対象科目です。正規生以外の参加の可能性があります。

GTC503J 神学･教会研究III（キリスト教と心理）

岡村 直樹

2 単位
大学院棟 講義室C
秋 木曜-3限,4限

＜授業の内容とねらい＞

本科目は、宗教的回心や献身といった宗教と人間の関係性の変化に関わる現象に着目し、そのプロセスや心理メカニズムの理解を目指します。ジェームス・ファウラー（Emory University）の心理的発達理論を応用した「信仰発達論」から、宗教心の発達の基本概念を学び、続けて、ジョン・ロフランド（University of California, Davis）等の研究を通し、宗教的回心の類別や、それらの社会的・文化的・心理的背景との関連における宗教心の発達について考察します。また後半は、現代日本の教会が直面する心理的課題や問題について話し合います。まず、クリスチャン・リーダーとして持つべき「心の健全さ」とは、どのような状態を指すのかについて、個人差も十分に考慮しつつ考えます。その上で、今日的課題である、うつ、発達障害、アダルトチルドレン、高齢者の心理的課題、死の準備と看取りといったトピックを取り上げ、教会の対応について共に考えます。授業形態は、講義と演習を併用します。

＜授業テーマと内容＞

第1週 ①宗教性の発達：聖書の教える成長と発達心理学の基本概念
第2週 ②宗教性の発達：ジェームス・ファウラーの信仰発達論・理論
第3週 ③宗教性の発達：ジェームス・ファウラーの信仰発達論・応用
第4週 ④宗教性の発達：若者の信仰発達とその課題
第5週 ⑤宗教性の発達：中高年の信仰発達と課題
第6週 ⑥宗教と心理的ケア：メンタルヘルスと教会
第7週 ⑦宗教と心理的ケア：うつと自殺予防
第8週 ⑧宗教と心理的ケア：発達障害とアダルトチルドレン
第9週 ⑨宗教と心理的ケア：高齢者の心理的課題
第10週 ⑩宗教と心理的ケア：死の準備と看取り

＜到達目標＞

（１）宗教的回心や献身といった宗教と人間の関係性の変化に関わる現象、及びそのプロセスやメカニズムを理解すること
（２）ジェームス・ファウラーの宗教心の発達の基本概念、ジョン・ロフランドの宗教的回心の類別、及びそれらの社会的・文化的・心理的背景との関連における宗教心の発達について理解すること
（３）キリスト教が重視する「共感力の涵養」「相互愛の形成」を宗教心の発達という観点から深く考察できるようになる事

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
B 説得力と表現力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

＜(*)教科書・参考書＞

岡村直樹 「クリスチャンユースの信仰成長に関するグランドセオリーを用いた質的研究」 『キリスト教教育論集』
日本キリスト教教育学会，2010年，1～16頁。
岡村直樹 「シニアミニストリーとスピリチュアリティーの質的研究」
『キリストと世界』(東京基督教大学紀要)第19号，2009，113～137頁。
堀江宗正 『歴史のなかの宗教心理学ーその思想形成と布置』 岩波書店，2009年。
James W. Fowler, Stages of Faith. New York: Harper One, 1995.
James Fowler, Faith Development and Pastoral Care. Minneapolis: Augsburg Fortress, 1987.

＜成績評価の方法と基準＞

課題 30 %
発表 30 %
期末レポート 40 %
すべての課題は、クラスにおいて相互発表していただきます。

＜準備学習等に必要な時間＞

クラス時間の約２倍の時間（４～５時間）を、本クラスのために用いる毎週の学習時間としてください。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

すべての課題は、クラスにおいて相互発表され、その場で教員やクラスメートからのフィードバックを受けます。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

課題作成のための構成の検討、表現の調整や校正等の利用を認めます。ただし、生成AIの利用プロセスを明示することが求められる場合があります。

＜その他履修上の注意点＞
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。
本科目は、「どこでもTCU」対象科目です。正規生以外の参加の可能性があります。

GTC504J 神学･教会研究Ⅳ（日本の諸宗教とキリスト教）

大和　昌平
清野 勝男子

2 単位
大学院棟 講義室C
春 水曜-3限,4限

＜授業の内容とねらい＞

このクラスは日本の諸宗教を理解し、それに対するキリスト教の弁明に取り組むことを目指して、二人の教員のオムニバス形式で行われるものです。
現代日本人は個人としては無宗教を標榜する人が大半なのですが、近代以降のその言説を精査した近年の研究である藤原聖子編『日本人無宗教説ーその歴史から見えるもの』をテキストとして学びつつ、現代日本人の宗教意識にキリストの福音をどのように弁明するのかを共に検討します。同時に教員は日本の諸宗教について講義します。（大和6回）。
日本の宗教の根底には葬送儀礼があります。個人的には「無宗教」を標榜する大多数の日本人も、社会的な慣習として様々な宗教的儀礼に従う生活を当然のこととして受け入れています。日本の通過儀礼としての葬送儀礼にキリスト者としてどう関わるのか、日本でキリスト教葬儀をいかに行っていくか。この本質的な宣教課題に、教員の著書を教科書として取り組みます。（清野４回）

＜授業テーマと内容＞

第1週 第一章　無宗教だと文明化に影響?ーー幕末～明治期（大和）
第2週 第二章　無宗教だと国力低下？ーー大正～昭和初期（大和）
第3週 第三章無宗教だと残虐に？ーー終戦直後～一九五〇年代（大和）
第4週 第四章　実は無宗教ではない？ーーー九六〇～七〇年代（大和）
第5週 第五章　「無宗教じゃないなら何？」から「私、宗教には関係ありません」にーーー九八〇～九〇年（大和）
第6週 第六章　「無宗教の方が平和」から「無宗教川柳」までーー二〇〇〇～二〇二〇年（大和）
第7週 通過儀礼としての葬送儀礼①（清野）
第8週 通過儀礼としての葬送儀礼②（清野）
第9週 日本におけるキリスト教葬儀①（清野）
第10週 日本におけるキリスト教葬儀②（清野）

＜到達目標＞

このクラスは二人の教員によって二つの角度から日本の諸宗教とキリスト教に向かい合おうとしています。前半は、日本人の無宗教説そのものを共同研究した藤原聖子編『日本人無宗教説ーその歴史から見えるもの』を共に精読し、現代日本人の宗教意識について、各自が理解をもち、福音との関わりをつかむことを目標とします。後半は、現象面で日本の宗教の中核をなす葬送儀礼を日本人の通過儀礼として理解し、それをキリスト者としてどう理解し、どう扱うのかを教員の著書をもとに理論的かつ実践的に考えることを目標とします。

＜DPとの関連＞

B 説得力と表現力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

グループ学習(ワーク・ディスカッション), 発表(プレゼンテーション）, 討議(ディベート)Debate, TCUオンライン, Teams

＜(*)教科書・参考書＞

＊藤原聖子『日本人無宗教説ーその歴史から見えるもの』(筑摩選書 ２５５)
＊清野勝男子『キリスト教葬制文化を求めてー聖書的通過儀礼の理論と実践ー』(IPC出版センター)
キリスト教葬儀研究会『日本宣教におけるキリスト教葬儀ー開かれたキリスト教葬制文化を目指して』（東京基督教大学国際宣教センター）
大和昌平『牧師の読み解く般若心経』YOBEL
佐藤雄基・大西信行『日本史を宗教で読みなおす』山川出版社

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 20 %
リフレクション 30 %
期末レポート 50 %
期末レポートは二人の教員からそれぞれ課題が出されます。最終評価は、主担当教員が行います。

＜準備学習等に必要な時間＞

前半は教科書の授業で扱う章を予め読み、そのリフレクションを書いて、授業ではディスカッションをしますので、一回の授業のため４～５時間の準備が必要です。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

リフレクションと期末レポートに対して教員がフィードバックを行います。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

＜その他履修上の注意点＞
教科書の清野勝男子『キリスト教葬制文化を求めてー聖書的通過儀礼の理論と実践ー』(IPC出版センター)はクラスで販売します。
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。

GTC505J 神学･教会研究Ⅴ (キリスト教と女性)

岩田 三枝子

2 単位
大学院棟 講義室C
冬 水曜-5限,6限

＜授業の内容とねらい＞

18世紀、ヨーロッパから始まった第1波のフェミニズムでは、参政権や教育を受ける権利を求めて立ち上がりました。その波はアメリカへ、また日本へと波及し、日本では大正時代の民主化の機運が大きく盛り上がる中、平塚らいてうや市川房枝たちが、女性が一人の人間として生きることや女性の政治への参加を求めて日本の婦人運動の先駆者となります。また、明治期から大正期にかけてヨーロッパやアメリカから多くの女性宣教師が来日したことにより、日本の女子教育は飛躍的に発展します。
本授業では、歴史的な一次資料も読みながら、フェミニズムとキリスト教の関わりを探究します。最終課題では、特定の女性キリスト者を研究し、社会や教会における役割を評価します。各受講生が一人の女性キリスト者をテーマとして取り上げ、関連する文献やオーラルヒストリーの収集・分析を通して、その人物の社会や教会における関わりや生き方、思想、また時代・文化背景における意義を掘り下げていきます。歴史の中に生きた一人の女性キリスト者を通して、その時代における意義と同時に、現代に生きる私達への示唆を考察することを目指します。

＜授業テーマと内容＞

第1週 オリエンテーション
第2週 テーマ発表
第3週 資料収集・フィールドワーク
第4週 資料発表
第5週 資料の読み込み・分析
第6週 中間研究発表
第7週 資料の分析・最終発表の準備I
第8週 資料の分析・最終発表の準備II
第9週 最終研究発表I
第10週 最終研究発表II

＜到達目標＞

1・現代日本におけるジェンダーの課題を、歴史的背景や社会的要因と関連づけて説明できる。
2. ☒世界と日本のフェミニズム史について、主要な思想や運動の流れを比較し、その影響を分析できる。
3.
キリスト教とフェミニズムの関係について、多様な視点を比較しながら批判的に考察し、自らの立場を論理的に示すことができる。
4. ☒研究テーマに基づき、人物に関する文献やオーラル・ヒストリー等を収集・分析し、歴史的・文化的視点からその意義を論じることができる。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
B 説得力と表現力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

グループ学習(ワーク・ディスカッション), 発表(プレゼンテーション）, 討議(ディベート)Debate, TCUオンライン, Teams

＜(*)教科書・参考書＞

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 20 %
課題 50 %
発表 30 %
積極的な授業参加を求めます。

＜準備学習等に必要な時間＞

クラスの復習や課題のために用いる毎週の学習時間は、クラス時間の約2倍を目安をとしてます。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

課題については、授業内やTeamsを通じてフィードバックを行います。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

課題作成のための調査、アイディア出し、資料の翻訳等の利用を認めます。
課題作成のための構成の検討、表現の調整や校正等の利用を認めます。ただし、生成AIの利用プロセスを明示することが求められる場合があります。

＜その他履修上の注意点＞
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。
合理的配慮の必要は受講生は、個別相談によって具体的な配慮の内容を検討します。

GTC506J 神学･教会研究VI（宗教改革史）

須藤　英幸

2 単位
大学院棟 講義室C
冬 火曜-3限,4限

＜授業の内容とねらい＞

「宗教改革史」（神学・教会研究VI）は、歴史的偉業を成し遂げたルターに焦点を当てて、彼のテキストを扱います。ルターによって始められた宗教改革は中世のカトリック的社会構造を根底から変革し、プロテスタント教会とプロテスタント的近代市民を生み出しました。この変革の起爆剤となったのは、修道士マルティン・ルターが神学教授としてヴィッテンベルク大学の聖書講義を通してたどり着いた、彼の神学的確信にありました。

本研究では、「神の義」をめぐる神学的突破によるルターの神学形成、すなわち、「十字架の神学」が表明される『ハイデンベルク討論』（1518年）から『ローマの信徒への手紙序文』（1522年）へ至る過程を追跡します。学生は指定されたテキストの読書範囲を事前に読んで、リフレクションを提出します。本研究のねらいは、ルターのテキストに真摯に向かいつつ、授業における自由な議論や発表を通して、ルターが捉えた福音の本質を把握することができるようになることです。

＜授業テーマと内容＞

第1週 イントロダクション
第2週 ルターとカルヴァン
第3週 ルターの神学的突破
第4週 ルターの十字架の神学
第5週 『ハイデンベルクにおける討論』(1518年)
第6週 『二種の義についての説教』(1519年)
第7週 『死への準備についての説教』(1519年)
第8週 『善い行いについて』(1520年)
第9週 『キリスト者の自由について』(1520年)
第10週 『ローマの信徒への手紙序文』(1522年)（受講者の進捗状況などにより、変更することがあります。）

＜到達目標＞

・ルターの「神の義」をめぐる神学的突破と十字架の神学を理解する。
・ルターが考えた福音の本質を説明することができる。
・ルターの福音理解を、自分に与えられたヴィジョンのための有益な知識として発展させる。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

＜(*)教科書・参考書＞

*『ルター著作選集』（キリスト教古典叢書）、マルティン・ルター、徳善義和訳、教文館、2012年
*『ルターの恩恵論と「十字架の神学」―マルティン・ルターの神学的挑戦』、須藤英幸、教文館、2024年
『宗教改革小史』、K・アッポルド、教文館、2012年
『宗教改革の思想』、A・マクグラス、教文館、2000年

＜成績評価の方法と基準＞

課題 20 %
発表 40 %
期末レポート 40 %
・読書課題は、指定されたテキスト範囲のリフレクションです。読んだことが分かるように、A4用紙（余白25mm、文字11ポイント）で30行以上にまとめたリフレクションを、次の授業中に提出してください。
・発表は、第4週と第8週の授業で各学生が発表するものです。
・期末レポートは、発表原稿に加えて、第9週と第10週のうちどちらかの議論の考察をまとめます。

＜準備学習等に必要な時間＞

クラス外で毎週約300分の学習時間を確保してください。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

読書課題の記入方法に問題があるときは、お知らせします。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

利用範囲は担当教員に確認してください。

＜その他履修上の注意点＞
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。
本科目は、「どこでもTCU」対象科目です。正規生以外の参加の可能性があります。

GTC507J 神学･教会研究Ⅶ（キリスト教の教理形成の歴史）

齋藤　五十三

2 単位
大学院棟 講義室C
春 火曜-3限,4限

＜授業の内容とねらい＞

本コースは、現在のキリスト教の主要な教理体系が、歴史的にどのような変遷をたどりながら形成されてきたのかを学ぶことを主な内容とします。本コースは、伝統的にはいわゆる「教理史」として扱われてきた内容です。それは単に歴史的観点から扱われるものではなく、キリスト教史もしくは教会史と組織神学（教義学）の間に位置する学際的な分野としての位置付けを持っています。本来、教理史の内容はまことに膨大なものですが、十週の限られたスケジュールですので、通史として全体を扱うことはせず、プロテスタント神学の観点から重要と思われる教理に焦点を絞りながら、それらが形成されてきた歴史の背景や、そこで交わされた議論を探り、神学的な論点がどこにあるのかを確認しつつ、その上で実践的かつ今日的な意義を学ぶことを目指します。また、授業の準備にあたっては、毎回、関連する一次資料を読んでいただきます。一次資料を神学的・歴史的に読み解き、分析する力を養うこともまた本コースのねらいです。

＜授業テーマと内容＞

第1週 福音の準備（ヘブライズムとヘレニズム）・キリスト教の亜流・公同の教会・弁証家
第2週 三位一体論の形成
第3週 キリスト二性一人格論の形成
第4週 自然と恩恵・東方教会（神論・キリスト論）と西方教会（人間論・救済論）
第5週 中世神学・スコラ主義神学・中世末期の思想
第6週 プロテスタント宗教改革（1）
第7週 プロテスタント宗教改革（2）
第8週 宗教改革期の論点（聖書論、聖餐論）
第9週 正統主義・啓蒙主義・敬虔主義・ロマン主義
第10週 （特別回）感染症と向き合う教理史

＜到達目標＞

三つの目標があります。①今日、キリスト教の教理体系として受け入れられているものの形成過程にどんな思想や背景があったのか、その歴史の大枠を把握します。
②そうした大枠を把握することで、キリスト教の教理体系が机上の空論ではなく、世の政治思想や人々の生活と密接に繋がった有機的な「生き物」であり、そうした教理形成が、歴史における「教会」や「キリスト者たち」の信仰のかたちを形成してきたことを理解します。
③上記のような「生きた」教理理解を得ることで、今日の教理的課題に向き合う正しい姿勢を歴史的・神学的・実践的に培っていくことを目指します。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

TCUオンライン

＜(*)教科書・参考書＞

J.ペリカン著、鈴木浩訳『キリスト教の伝統：教理発展の歴史』第1-5巻
A.E.マクグラス著、神代真砂実訳『キリスト教神学入門』教文館
齋藤五十三『神の子とする恵み ― 宗教改革信条史再考』教文館

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 30 %
課題 20 %
期末試験 50 %
授業参加度は出席とディスカッションへの参加、そして毎回授業後に提出を求めるリフレクションでポイントをつけていきます。「課題（＝リアクション）」は、毎回の授業前に一次資料を読んでいただいた上で提出していただくものです。

＜準備学習等に必要な時間＞

授業前の課題（リアクション）、授業後のリフレクションのため、毎週280分を確保してください。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

リアクション、リフレクション、期末レポートそれぞれにフィードバックを返します。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

課題作成のための調査、アイディア出し、資料の翻訳等の利用を認めます。
課題作成のための構成の検討、表現の調整や校正等の利用を認めます。ただし、生成AIの利用プロセスを明示することが求められる場合があります。

＜その他履修上の注意点＞

J.ペリカン著、鈴木浩訳『キリスト教の伝統：教理発展の歴史』第1-5巻が主要な参考書となります。学生には高額ですので、図書館のリザーブ図書に指定します。
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。
本科目は、「どこでもTCU」対象科目です。正規生以外の参加の可能性があります。

GTC508J 神学･教会研究Ⅷ（近現代のプロテスタント神学）

須藤　英幸

2 単位
大学院棟 講義室C
秋 水曜-3限,4限

＜授業の内容とねらい＞

「近現代のプロテスタント神学」（神学・教会研究VIII）は、近現代の多様な神学を扱います。近代が理性の時代だとすれば、現代は多様化の時代だと言えます。これに呼応した形で、まず自由主義神学が近代神学を形成しましたが、現代になると、特に19世紀後半は神学が多様化し、福音主義神学を含めた神学の世界的潮流を把握することもままならない状況です。同時に、神学の発信地がかつてのヨーロッパー極からからアメリカへ、さらに世界へと広がりを見せています。したがって、現代神学を正しく把握するためには、世界の人々との相互理解や宣教の視点も求められます。

本研究では、学生は指定されたテキストの読書範囲を事前に読んで、リスポンス課題を提出します。本研究のねらいは、テキストに真摯に向かいつつ、授業における自由な議論や発表を通して、近現代の神学を適切にかつ健全に理解できるようになることです。くわえて、現代神学との関わりを深めることによって、現代に生きる自分自身の信仰生活を批判的に吟味することができ、また、自分の誤りを自ら修正していける能力を身につけることです。

＜授業テーマと内容＞

第1週 宗教改革者の神学
第2週 バルトと新正統主義神学
第3週 福音主義神学とエヴァンジェリカル
第4週 発表日１
第5週 フェミニスト神学
第6週 アジアとポストコロニアル神学
第7週 ポストリベラル神学と物語の神学
第8週 発表日２
第9週 自由意志による神義論
第10週 十字架の神義論 （受講者の進捗状況などにより、変更することがあります。）

＜到達目標＞

・近現代神学、特に多様な現代神学の流れを全体的に把握し、説明できるようになる。
・近現代神学の意義を適切に理解し、公正に評価できるようになる。
・自分の信仰的立場を客観的に理解することができるようになる。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

＜(*)教科書・参考書＞

*『現代神学の最前線』、栗林輝夫、新教出版社、2004年
*『アメリカ現代神学の航海図』、栗林輝夫、新教出版社、2018年
*『苦しみと悪を神学する: 神義論入門』、マーク・S.M.スコット著、加納和寛訳、教文館、2020年
『キリスト教史 下巻』、フスト・ゴンザレス著、石田学・岩橋常久訳、増補版、新教出版社、2020年

＜成績評価の方法と基準＞

課題 20 %
発表 40 %
期末レポート 40 %
・読書課題は、指定されたテキスト範囲のリフレクションです。読んだことが分かるように、A4用紙（余白25mm、文字11ポイント）で30行以上にまとめたリフレクションを、次の授業中に提出してください。
・発表は、第4週と第8週の授業で各学生が発表するものです。
・期末レポートは、発表原稿に加えて、第9週と第10週のうちどちらかの議論の考察をまとめます。

・発表は、第4週と第8週の授業で各学生が発表するものです。
・期末レポートは、読書課題や発表をまとめ、それに総括を付したものです。

＜準備学習等に必要な時間＞

クラス外で毎週約300分の学習時間を確保してください。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

読書課題の記入方法に問題があるときは、お知らせします。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

利用範囲は担当教員に確認してください。

＜その他履修上の注意点＞

本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。

GTC509J 神学･教会研究IX（現代における宣教と教会）

篠原　基章

2 単位
大学院棟 講義室B
秋 水曜-5限,6限

＜授業の内容とねらい＞

宣教は聖書全体を貫くテーマです。教会にとって宣教は最も身近な概念の一つですが、その理解は一様ではなく、論争の火種となってきました。20世紀の宣教思想史はまさに宣教を定義し、さらに定義し直すことの積み重ねであったともいえます。本科目では「神の宣教」（missio Dei）と「神の宣教の民」という観点から聖書全体を読み解き、その理解を土台としつつ、現代における宣教と教会の在り方について考察していきます。
また、このクラスでは「信徒の神学」について考察していきます。「信徒の神学」とは信徒のためのわかりやすい神学ではなく、信徒とは何かを神学的に問うことです。いうなれば「信徒の神学」とは信徒のアイデンティティを問い直すことだといえます。ヘンドリック・クレーマーは信徒を「教会の凍結財産」と呼びました。「信徒」を問うことは、実に「教会」と「宣教」そのものを問い直すことでもあります。
本科目では『センターチャーチ』（ティモシー・ケラー著）を教科書とし、福音主義神学の土台に根差しつつ、現代の文化と社会における教会の使命と宣教の方策について考察していきます。

＜授業テーマと内容＞

第1週
現代における宣教と教会ー19世紀、20世紀、21世紀の宣教のコンテキストを考えるー（パート①）＋『センターチャーチ』：序章
第2週
現代における宣教と教会ー19世紀、20世紀、21世紀の宣教のコンテキストを考えるー（パート②）＋『センターチャーチ』：第1部（第1章～第3章）
第3週 「宣教」（Mission）とは何かー20世紀の宣教思想史ー（パート①）＋『センターチャーチ』：第2部（第4章～第6章）
第4週 「宣教」（Mission）とは何かー20世紀の宣教思想史ー（パート②）＋『センターチャーチ』：第3部（第7章～第10章）
第5週 宣教の民としての教会ー宣教的教会論ー（パート①）＋『センターチャーチ』：第4部（第11章～第14章）
第6週 宣教の民としての教会ー宣教的教会論ー（パート②）＋『センターチャーチ』：第5部（第15章～第18章）
第7週 信徒の神学＋『センターチャーチ』：第6部（第19章～第21章）
第8週 文化命令（Cultural Mandate）ー教会の文化的使命ー＋『センターチャーチ』：第7部（第22章～第26章）
第9週
日本文化とキリスト教ー遠藤周作の『沈黙』と『深い河』を手がかりとしてー＋『センターチャーチ』：第8部（第27章～第30章）
第10週 総論ー現代日本を生きる旅人・寄留者としての教会ー

＜到達目標＞

1. 聖書全体から宣教と教会を捉え、神学的に宣教と教会が何を意味するかを自分言葉で論じることができるようになる。
2. ティモシー・ケラーが『センターチャーチ』で提示している内容を理解し、宣教と教会における福音の中心性と文脈化の重要性、そして有機的なムーブメントとしての宣教の在り様について論じることができるようになる。
3. 教会のあり方と宣教のあり方について、自分なりの考えを整理し、論じることができるようになる。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力
B 説得力と表現力
C 深い他者理解と協働をもたらす倫理性と品格

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

発表(プレゼンテーション）, 討議(ディベート)Debate

＜(*)教科書・参考書＞

ティモシー・ケラー『センターチャーチ』（いのちのことば社、2022年）
デイヴィッド・ボッシュ『宣教のパラダイム転換
下巻ー啓蒙主義から21世紀に向けて』（東京ミッション研究所選書シリーズ４、東京ミッション研究所訳、新教出版社、2002年）
ジョン・ストット、クリストファー・J・H・ライト共著『今日におけるキリスト者の宣教』（いのちのことば社、2016年）
チャールズ・リングマ 『風をとらえ、沖へ出よ： 教会変革のプロセス』 深谷有基訳 （あめんどう、2017年）
フィリップ・ヤンシー『教会ーなぜそれほどまでに大切なのか』（いのちのことば社、2000年）
ヘンドリック・クレーマー『信徒の神学』（現代神学双書2）小林信雄訳（信教出版社、1987年〔初版：1960年〕）
ティモシー・ケラー『この世界で働くということー仕事を通して神と人とに仕える』(いのちのことば社、2018年)
シェンキェーヴィチ『クオ・ワディス』〈上・中・下〉（岩波文庫、1995年）
O. ブルーダー『嵐の中の教会』（新教出版社、1989年）
ローザンヌ運動『ケープタウン決意表明』（いのちのことば社、2012年）
※オンラインでも閲覧可能。リンク：ケープタウン決意表明

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 10 %
リフレクション 30 %
中間レポート/試験 30 %
期末レポート 30 %
各回のリーディングとリフレクションペーパー（各300から400字程度）
課題図書レポート（1,000字程度）x3回
まとめレポートと発表（2,000字程度）

＜準備学習等に必要な時間＞
・第一回目の授業までに、『センターチャーチ』の「序章」を読んでくること。
・一回の授業のために最低限４時間程度の読書の準備。
・合理的配慮が認められた場合、レポートの提出期限を延長することが可能となります。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞
適宜、口頭または文面でフィードバックを行います。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞
課題作成のための調査、アイディア出し、資料の翻訳等の利用を認めます。

＜その他履修上の注意点＞
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。
合理的配慮として、レポートの提出期限の延長等を適宜行います。

GTC510J 神学･教会研究Ｘ（日本キリスト教史）

山口 陽一

2 単位
大学院棟 講義室C
秋 金曜-3限,4限

＜授業の内容とねらい＞

学部の「日本キリスト教史（通史）」はアジア太平洋戦争期までを扱い、大学院の「日本キリスト教史」は日本プロテスタントの戦後史を扱います。最初の２回で講義を行い、戦中と戦後にそれぞれ一回ずつをあてて概観します。3回目は学生全員が一冊ずつ各個教会１００年史を読みディスカッションを行います。ここでは教会における歴史資料保存や教会史の執筆についても考えます。７回は学生の発表に基づく演習です。演習は、戦後７０年を７回に分け、その時代について考察しますが、学生はそれぞれその時代のテーマを決めて発表します。これは最初の時間に相談して決めます。発表に基づいて教員の解説も加えつつ、全員での討論を行います。本学の背景にあるプロテスタント福音派の戦後史を、いわゆる主流派のそれと比較検討し、その特徴と課題を考察します。こうした検討を通して、学生は自分の所属教会のおかれた位置を確認し、これを尊重しつつ他のキリスト教とも協働できるよう教会史的知識を身につけることをめざします。

＜授業テーマと内容＞

第1週 プロテスタントの戦後史概論
第2週 プロテスタントの戦後史概論
第3週 各個教会史から見た戦中戦後、教会アーカイブスについて
第4週 1945年～1954年
第5週 1955年～1964年
第6週 1965～1974年
第7週 1975～1984年
第8週 1985～1994年
第9週 1995～2004年
第10週 2005～今日

＜到達目標＞

日本のキリスト教の戦中と戦後の歴史についての基本的知識を身につけること。そこにある教会史的重要課題を把握すること。自分が属する教派の特徴を理解すること。以上をふまえてキリスト教会全体と日本社会における使命を確認する。

＜DPとの関連＞

A 現代社会の神学的諸課題を分析する力

＜授業形態＞

対面授業

＜授業方法＞

＜(*)教科書・参考書＞

中村敏 『日本キリスト教宣教史』 いのちのことば社，2009年。
山口陽一他 『教会アーカイブズ入門 記録の保存と教会史編纂の手引き』 いのちのことば社，2010年。
日本キリスト教歴史大事典編集委員会編 『日本キリスト教史年表 改訂版』 教文館，2006年。
土肥昭夫 『思想の杜 日本プロテスタント・キリスト教史より』 新教出版社，2006年。
日本福音同盟 『21世紀の福音派のパラダイムを求めて』 日本福音同盟，2006年。
鈴木範久『日本キリスト教史 年表で読む』教文館
山口陽一ほか『聖書信仰の成熟をめざして』いのちのことば社
新教出版社編集部『戦後７０年の神学と教会』新教出版社
第５回日本伝道会議『日本開国とプロテスタント宣教１５０年』いのちのことば社
「教会と政治」フォーラム編『キリスト者から見る天皇の代替わり』いのちのことば社

＜成績評価の方法と基準＞

授業参加度 20 %
リフレクション 20 %
発表 30 %
期末レポート 30 %
発表はレジュメを用意して20～30分、レポートはA4用紙に6000～7000字。

＜準備学習等に必要な時間＞

毎週1時間、発表者は10～15時間

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

発表、リフレクション、レポートに対してコメントします。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

＜その他履修上の注意点＞
本科目を履修するオンラインプログラム生がいる場合にのみハイブリッド授業となります。
本科目は、「どこでもTCU」対象科目です。正規生以外の参加の可能性があります。

GRS700　神学特論

岡村 直樹
伊藤 明生 / David Sytsma

2 単位
オンライン（zoom)
春 月曜-1限,2限

＜授業の内容とねらい＞

本科目は、神学的課題について、神学上の総合的な観点から取り扱うための学術的方法論を、高いレベルで修得することを目的とします。
博士論文の作成には、修士論文と比較し、より独自性と創造性のある内容が求められます。そのため資料収集、分析方法及び研究手段についても、更に高度な理解を求められます。
また英語による研究・討論の能力の伸長を意図し、授業は英語を主用言語として演習形式で行います。

In order to conduct doctoral-level studies in theology, students not only must possess extensive knowledge of research methodologies in their own specific subjects, but they also must have a broad awareness of theological studies in general. This course will introduce to students important academic recourses in biblical studies, theology, and ministry in order to give them a better understanding of these fields in preparation for their own original research.

＜授業テーマと内容＞

＜到達目標＞

東京基督教大学博士課程における専門分野（旧約聖書、新約聖書、歴史神学、哲学、実践神学）からの学びを通して、神学の博士課程で学ぶ者に相応しい知識と応用力、また研究を推進するためのリサーチ能力を身につけます。

＜DPとの関連＞

＜授業形態＞

＜授業方法＞

発表(プレゼンテーション）, 討議(ディベート)Debate, TCUオンライン

＜(*)教科書・参考書＞

＜成績評価の方法と基準＞

リフレクション 100 %
授業参画度及び各課題
最終評価は、コーディネーターが行う。

＜準備学習等に必要な時間＞

教員のインストラクションに従いつつ、十分な学びの時間を確保してください。

＜課題（試験やレポート）に対するフィードバック＞

少人数のクラスであり、教員と学生の密なコミュニケーションを通して、意見交換やフィードバックが行われます。

＜レポートや課題作成に関する生成AIの利用について＞

課題作成のための構成の検討、表現の調整や校正等の利用を認めます。ただし、生成AIの利用プロセスを明示することが求められる場合があります。

＜その他履修上の注意点＞

主に、博士課程入学者のあった年度の春学期に実施されます。